

動機づけと社会環境

—— 制御焦点と関係流動性の関連についての社会生態学的分析 ——

氏名：日野陽平

指導教員：結城雅樹

人々は日々様々な行動をしている。そして、その背後には動機づけが存在する場合が多い。Higgins, E.T.が提唱した制御焦点理論では、制御焦点は促進焦点と予防焦点から構成されるとしており、利得や成功に焦点化して利得や成功を追い求めようとするときに働かせる動機づけを促進焦点、損失や失敗に焦点化して損失や失敗を避けようとする動機づけを予防焦点と呼ぶ(Higgins, 1998)。本研究では、先行研究(Hamamura et al., 2009)と同様に制御焦点に日米差が見られ、アメリカで暮らす人々は日本に暮らす人々よりも促進焦点をより強く働かせており、日本で暮らす人々はアメリカに暮らす人々よりも予防焦点をより強く働かせているということが明らかになった。ただし、先行研究の中に制御焦点の文化差が生じるメカニズムを実証的に明らかにしているものはなかった。そこで本研究では、制御焦点の日米差は、関係流動性により特徴づけられる社会環境に人々が戦略的に適応した結果生じるものであるという仮説を立て、関係流動性を社会生態学的要因として用いた社会生態学的アプローチを用いて実証的に検討しようと試みた。まず、国（日本・アメリカ）を独立変数、関係流動性を媒介変数、制御焦点を従属変数とした媒介モデルを検証した結果、間接効果が有意となり、関係流動性の日米差が制御焦点の日米差が生じる一つの要因となっていることが明らかになった。次に、上記の仮説を検討するにあたっての前提条件を確認するため、制御焦点の強さが対人関係における社会的成功度に与える影響度の国（日本・アメリカ）による調整効果に日米差が存在するかどうかを確かめた。その結果、制御焦点の強さが対人関係における社会的成功度に及ぼす影響度に対する国による調整効果の日米差は存在しないということが明らかになった。そのため、制御焦点の強さが対人関係における社会的成功度に与える影響度の日米差に対する関係流動性の調整効果の検証、つまり仮説の検証に移行することができなかった。本研究の成果としては、制御焦点の日米差が見られ、関係流動性が制御焦点の日米差が生じる一つの要因になっているということを明らかにできたことがある。しかし、制御焦点の日米差が生じるメカニズムを実証的に明らかにできなかったことは本研究の課題である。今後の研究の進展に期待しつつ筆をおきたい。